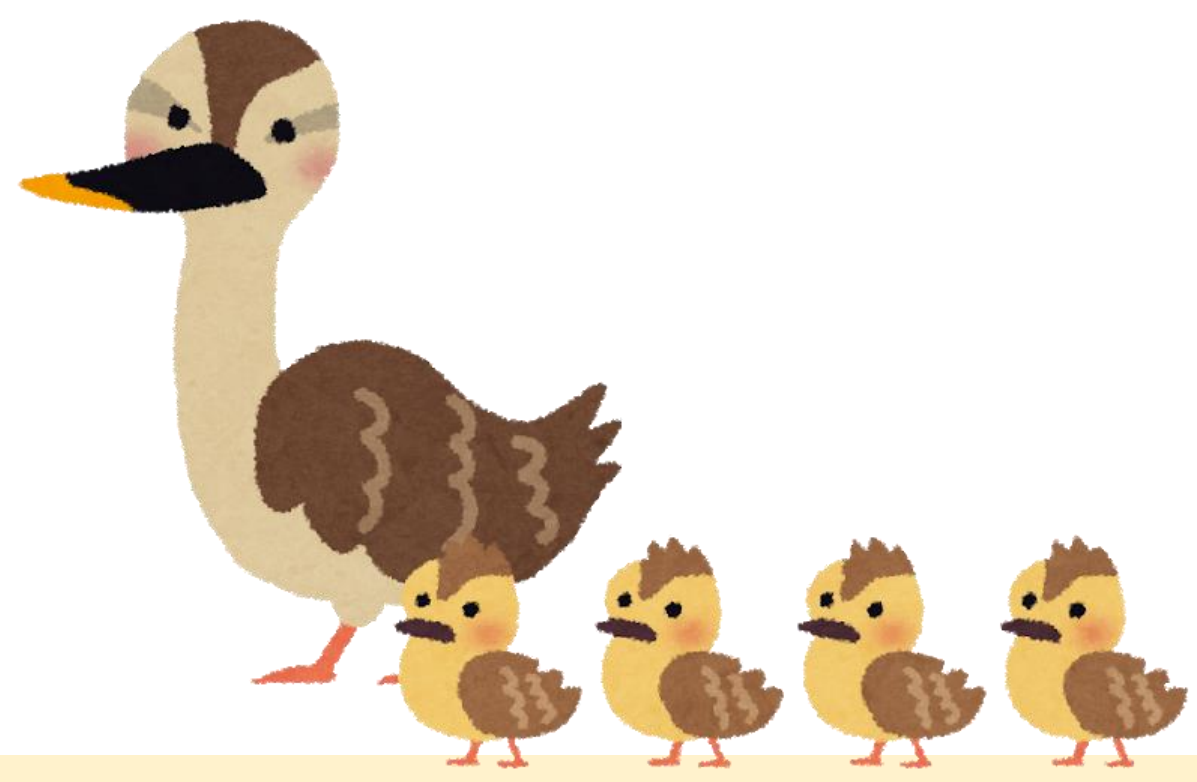


そだてるしあわせ

「障害」を持つ子どもを育てる親の言葉から



武蔵野大学通信教育部
武蔵野大学人間科学部
武蔵野大学教育学部こども発達学科
東京医療保健大学老年・在宅看護学

前廣美保
矢澤美香子
義永睦子
山本由子

【背景】

「私たち親は障害のある子を愛していないわけではありません。それでも、もううんざりだと思ふこともあるのです。」「魔法や奇跡が起こらないそんな日々を、それでも必死に過ごしている。(福井: 2013 p.23)」と述べ、障害のある子の母親が「ありのままの私」を語ることの必要性を論じている。(p.223)

一般的に「障害」とは、弱く劣った存在で、支援が必要だとみなされる傾向がある。子どもを産み育てる母親が、「障害」と呼ばれる個性を持った子どもを育てている場合、より多くの困難や苦労を経験していると考えられる(伊藤2010,藤原2002,中村・池田2009)。それでも、新しい課題に前向きに挑戦を続け、明るく魅力的な障害児の親の存在などから、子どもの成長の喜びや新しい体験を通して「しあわせ」を感じる事がたびたびあるのではないかと考えた。

challenged (挑戦すべき課題) gifted (突出した才能) と捉えると、
「障害」を持つことは、その人にとって特別な能力や個性の一つである

【目的】

障害児を育てている親の生きた語りから、「そだてるしあわせ」とは何かを考える

【方法】

- ・ 武蔵野大学キャンパス内で月に一度、子育てひろばを開催
- ・ 参加者との関わりを通じた実践研究
- ・ エピソード記述分析, ナラティブ分析

【内容】

- ・ ひろばスタッフとして、共同研究者4人のうち2名以上が参加し、ボランティアスタッフと共に親がくつろげる場の運営を担当する
- ・ 昼食、軽食をはさみ、ゆっくり話ができる場所を提供する
- ・ 専門職スタッフが相談を受けたり、話を傾聴したりする

【仮説】

障害児を育てていると以下のような機会が多くなると考えられる

- (1) 親自身が自己実現を考える
- (2) ゆっくりと時間をかけて子どもの日々の成長を感じる
- (3) 親子ともに「ひとりの人として尊重される」必要性を感じる

(1)~(3)の要因が「そだてるしあわせ」につながるのではないか。障害をもつ子どもを育てる親から学ぶ「しあわせ」は、どんな子どもを育てる親にとっても大切な意義を提示できる。

ユニバーサルな「そだてるしあわせ」を「障害」から学ぶことで、社会全体が子育てしやすい環境を考えていく機会としたい。

対象者: 就学年齢以上で「障害」の可能性のある子どもを育てている親 * 診断の有無は問わず

募集方法: 近隣の関連団体・施設へチラシを配布すると共に個別に声をかける

場所: 武蔵野キャンパス内
期間: 2018年9月~不定期
日時: 随時お知らせ
(金)10:30~14:30予定

